



関西学院大学 社会学部

社会学科 大谷信介研究室 分野：社会調査の調査研究

社会調査の実態を解明し、展望を探り、 今後を担う「社会調査士」を育成する

（あらゆる都市的といわれるものの中身を議論する）

「都市的なものとは一体何か」ということを主なテーマに、都市社会学に取り組む大谷信介先生。都市についてのあらゆる疑問を検討し解明することが、この研究の大きな課題である。

例えば、新しいものや文化が生み出されるのは、多くの場合都市であるのはなぜかという疑問がある。それについて大谷先生は、「都市が平準化された環境だからだ」という。地方では、ほとんどの人がその土地で一番偏差値が高い高校がどこかを知っていて、その高校出身の人が尊敬を受け、それ以外の人コンプレックスを持っているという状況がよくみられる。つまり、余計な要素で評価されてしまうことが往々にしてあるのだ。しかし、都市に出てくればその人が卒業した高校がどんなレベルかなど誰も知らないし、そんなことはたいした問題ではない。都市には学歴など関係なく、自分の実力一つで勝負できる環境、すなわち平準化された環境が整っているのである。新しいものが

生まれる、生まれないは環境の違いだと大谷先生は考えている。では、その違いは、住民の人間関係の形成プロセスにも起因するのだろうか、もしそうならどう影響するのかを考えなければならない。このように、都市的なもの、都市的だといわれるものについての疑問を解明し、それを裏付けるための社会調査を行うのが、都市社会学という学問である。

そこからはまた「都市問題についての調査は、従来の方法で本当によいのか。調査技術を開発しなければならないのではないか」という議論が生じてくる。これ考えるのが、大谷先生の研究のもう一つの柱、「社会調査の研究」である。

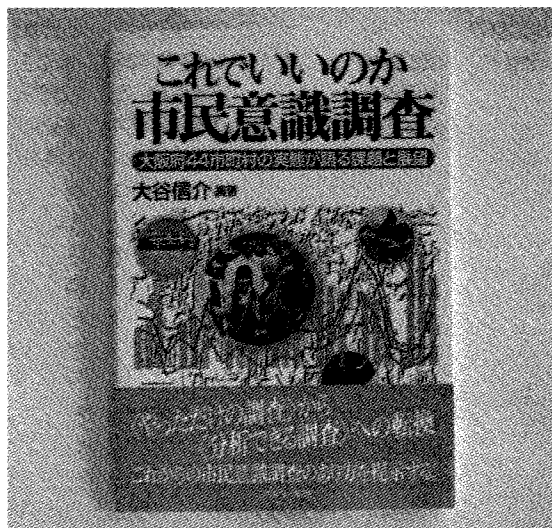
（市民意識調査の実態を調査したゼミの成果が一冊の本に）

02年10月、大谷先生とゼミ生の共同執筆による『これでいいのか市民意識調査』が発行された。これは、大谷先生のゼミ生が、00年から01年にかけて大阪府44市町村での市民意識調査について、その時期や実施方法、委託先、委託費用、回収率などの実態を調べて分析し、ゼミ生自身が執筆編集までを手掛けて完成した一冊。ゼミのテーマ「社会調査の調査研究」の結果が形になったものだ。

さらに、調査についての評価もおこない、質問文にミスはないか、データとして使えるかという基準に照らして4段階に格付けした結果、最高のAはゼロ、ぎりぎり合格のBが15市町村だった。市民の時間と税金を費やししながら、データが有効活用されていないことが明らかになった訳だ。

「社会調査としてデータ化でき、分析できる調査に変えていく必要がある。今後は、正確で効率よい調査が行える社会調査士の必要性が高まるはず」と大谷先生は話す。

「今年の4年生は国勢調査の調査研究を行っていて、問題意識も意欲も強い学生たちばかりです。このゼミから、優秀な社会調査士がたくさん育ってくれることでしょう」と、先生は期待を寄せている。



『これでいいのか市民意識調査』は反響も大きく、すでに増刷もされている

学部のキモチ

「商品購入者や雑誌定期購読者等の顧客コースを知りたい」「通勤・通学者が電車やバス利用の際に感じている不満を知りたい」といったように、現代情報化社会では、社会調査によって得られる情報がいよいよ貴重になっています。実社会での様々な分野における社会調査やフィールドワークに関する専門知識・技能は、ますます重要性が高まるでしょう。その状況のなか、関西学院大学は全国で最初に「社会調査士」の資格を制度化。「社会調査士コース」を設けて、社会調査の基礎知識、および具体的な調査方法やノウハウ、さらに最新の理論や方法論を、1年間でマスターできるように講義科目、演習科目をプログラムしています。2004年度には、日本社会学会などが中心となって、全国規模の「社会調査士」制度が発足し、本学に認定機関の事務局が置かれます。まさに社会調査士育成の先端をいく大学として、注目を集めています。

- 学部所在地 兵庫県西宮市上ヶ原一丁目1-155
- 問い合わせ先 関西学院大学入試部 〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一丁目1-155 TEL0798-54-6135
- 大学URL <http://www.kwansei.ac.jp/>

大学資料請求方法



資料請求番号
559

- ◆送料とも無料
- ◆詳細は134ページをご覧ください。